

『フランケンシュタイン』のもう一人のプロメテウス ——ウォルトンと「現代のプロメテウス」の人間化——

アルヴィ宮本なほ子

I. 二人のプロメテウス

現在、文学だけではなく生命工学をはじめとして様々な分野で論じられることが多い『フランケンシュタイン、あるいは現代のプロメテウス』(*Frankenstein; or the Modern Prometheus*)は、1818年に匿名で出版された。その著者と作品の構想の経緯は、1831年にいくつかの大きな修正を加えた第3版が出版されたとき、新たに著者メアリ・ウルストンクラフト・シェリー (Shelley [née Godwin], Mary Wollstonecraft 1797–1851) の“Author’s Introduction to the Standard Novels Edition”によって明らかになった¹⁾。作品の構想は、著者がまだメアリ・ゴドウィンであった1816年の夏に遡る。スイスのレマン湖のほとりのバイロン (Byron, George Gordon Noel, sixth Baron Byron 1788–1824) のディオダーティ荘に集ったパーシー・ビッシュ・シェリー (Shelley, Percy Bysshe 1792–1822、以後 PBS と表記) とメアリ・ゴドウィン、バイロンの侍医のポリドリ (Polidori, John William 1795–1821) に、バイロンは“wet, ungenial summer”の無聊を慰めるために“We will each write a ghost story”と提案し、幾日も考え続けたメアリがある夜中に見た夢がこの物語の発端となった²⁾。1818年の初版では、第1巻第4章のクライマックスとなる部分である。

I saw the pale student of unhallowed arts kneeling beside the thing he had put together. I saw the hideous phantasm of a man stretched out, and then, on the working of some powerful engine, show the sign of life. (Shelley 196)

メアリ・シェリー (以後 MWS と表記) は、この「序文」の最後で、“And now, once again, I bid my hideous progeny go forth and prosper”と命じている (197)。その言葉通り、出版以来、この作品のタイトルとなっている主要登場人物ヴィクター・フランケンシュタイン (Victor Frankenstein) と彼が創造した名前すら与えられない生命体は、作者の意図をはるかに超えて“prosper”することになる³⁾。

しかし、作者の意図をはるかに超えて後の時代、特に21世紀の現代に重要な意味を持つのは、生命を創り、遺棄したヴィクター・フランケンシュタインと「フランケンシュ

タイン」という名前とその怪物的イメージで(誤って)記憶されている人工的に造られた生命体だけではない。本論では、書簡や手稿の中に語りが埋め込まれる重層的な語りの構造を持つこの作品の一番外側の語りの枠組みで、フランケンシュタインの語りに耳を傾け、彼とその被造物の物語を記録する北極探検船の船長にして科学者であるロバート・ウォルトン (Robert Walton) に焦点をあて、科学者が「現代のプロメテウス」となり、科学の目覚ましい進歩に時代が大きな期待を寄せていたときに、MWS が科学者の失敗を描くことの意味を考察する。

この作品は、上述したように、若い科学者ヴィクター・フランケンシュタインの生命創造を核として構想された。外枠のウォルトンの物語——彼が北極探検の途上でイギリスに住む妹 (Margaret Walton Saville)⁴⁾へ送る手紙と手記という形式を取る——については、原稿が残っていないので正確には分からないのであるが、おそらく、1816年9月から1817年4月の間に付け加えられたと考えられている (Robinson xxv–xxvi)⁵⁾。どちらの物語でも、科学者は人類の進歩に役立つと考えられる研究に失敗し、中断を余儀なくされる。ウォルトンの物語のこの段階での追加は、MWS の文学的想像力が、当時の科学の発展、イギリスの海外進出と結びついた海軍主導の調査探検の航海に、どのように批判的・創造/想像的に応答したのかを検討するために非常に興味深い。フランスとの長い戦争で中断していた北西航路を探索する北極探検は、1818年1月——『フランケンシュタイン』の初版が出版されるのと同時期——再開が告知され、イギリス海軍は、2つの北極探検隊を送り出す。1819年にも2つの探検隊が送り出され、その一つを率いて、驚くべき困難に打ち克ち、3年後に帰還したジョン・フランクリン (Franklin, Sir John, 1786–1847) は英雄としてもはやされた。

『フランケンシュタイン』では、ウォルトンがヴィクターの物語を伝える手紙、手記の年代が半分(意図的に)消されている。年代は物語の中の状況証拠から推測するしかないのであるが、18世紀末と考えられる。この当時、「現代のプロメテウス」と科学はどのように結びついていただろうか。1818年の初版では、フランケンシュタインの少年時代に、父が息子にベンジャミン・フランクリン (Franklin, Benjamin, 1706–1790) の1752年の嵐の実験を再現してみせることによって稲妻が電気放電であることを教えるエピソードがある (vol. 1 ch. 1. 23)。政治家、外交官、印刷業者などいくつかの顔を持つアメリカ人ベンジャミン・フランクリンは、科学技術の発展にも多大な貢献をし、地震の原因の研究や避雷針の研究で有名であった。嵐の実験によって当時最も有名な科学者となった⁶⁾。ヨーロッパ最大の自然災害となった1755年のリスボン大地震の翌年、カント (Kant, Immanuel, 1724–1804) は、「自然哲学者」として地震のメカニズムに取り組んだ論文の中で⁷⁾、フランクリンを「現代のプロメテウス」(“the Prometheus of modern times, Herr Franklin”)と呼んだ(373)⁸⁾。自然の力を解明していく科学者たちの「現代のプロメテウス」のような力は、インゴルシュタットのウォルドマン教授が、17歳のヴィクターを科学へと

誘う時の言葉遣いにも如実に現れている。

They [the modern masters of science] ascend into the heavens . . . They have acquired new and almost unlimited powers; they can command the thunders of heaven, mimic the earthquake, and even mock the invisible world with its own shadows. (vol. 1. ch. 2, 30–31)

しかし、カントが使った「現代のプロメテウス」は、戒めの言葉でもあった。カントは「現代のプロメテウス」が人間以上のものになることに警鐘を鳴らしている。

From the Prometheus of modern times, Herr Franklin, who sought to disarm the thunder, to the man who sought to extinguish the fire in Vulcan's workshop, all such endeavors are proofs of boldness of man, allied with a capacity which stands in a very modest relationship to it, and ultimately they lead him to the humiliating reminder, in which is where he sought properly to start, that he is never anything more than a human being. (373)

科学の無限の可能性を追求することが人間に人間の領域を超えさせるかもしれないというカントの懸念は、科学が驚異的に発達するイギリス・ロマン主義の時代以降ずっと考え続けねばならない問題となる。外枠のウォルトンの物語でも、ウォルトンが記録したフランケンシュタインの物語でも、この懸念が共有されていることは強調されてよい。

ウォルトンは、北極航路の発見と北極での磁力の実験という、当時イギリスの調査探検隊がまだ成功していなかった領域の探索と新しい科学実験に闘志を燃やす若い科学者であり、探検船を率いる船長である。彼は、フランケンシュタインとほぼ同じ言葉遣いで、人類に限りない恩恵をもたらす (“the inestimable benefit which I shall confer on all mankind to the last generation”) 科学的な発見をする希望とその計画 (“discovering a passage near the pole to those countries, to reach which at present so many months are requisite; or by ascertaining the secret of the magnet, which, if at all possible, can only be effected by an undertaking such as mine”) について語っている (vol. 1 letter 1. 6)。ウォルトンはもう一人の「現代のプロメテウス」 (= 科学者) となりうる人物であり、しかも、ウォルトンは、生命を創造するフランケンシュタインよりも、より現実的な、つまり、当時、実際にいたかもしれない人物として造型されている。科学者の生命倫理の問題を扱うフランケンシュタインの物語に比して、ウォルトンの物語の重要性はまだ十分に認識されていないが、本論では、ウォルトンとフランケンシュタインの比較、ウォルトンと 18 世紀後半から 19 世紀前半のイギリス海軍による調査探検に従事した人物たちとの比較を通して、ウォルトンがフランケンシュタインとは別の選択をしたことの意義を考察する。

II. 調査探検隊を率いるウォルトンの半生

『フランケンシュタイン』は、北極探検へ向かう調査探検船の船長であり、かつ北極で磁気の解明や北西航路の発見を目論む科学者ウォルトンの4通の手紙で始まる。手紙では自己のこれまでの半生が語られる部分があるが、最初の手紙には、ウォルトンが貴族階級出身ではなく、子供のときに父を亡くしていること (*Frankenstein* vol. 1. letter 1. 6)、高等教育を受ける機会がなかったこと、海洋探検の蔵書を収集していた叔父の蔵書を愛読していたので、父の最期の言葉に従って後見人の叔父が彼を海に出さないようにしていたことを知って残念に思ったこと (“that regret which I had felt, as a child, on learning that my father’s dying injunction had forbidden my uncle to allow me to embark in a seafaring life”) が書かれている (vol. 1 letter 1. 6)。ウォルトン少年は、18世紀後半から19世紀前半のイギリス・ロマン派の時代に海への憧れを抱いていた多くの少年の一人であり、彼は、貴族階級、あるいは海軍上層部と縁故を持つような家の出身ではない。例えば、ネルソン (Horatio Nelson, Viscount Nelson, 1758–1805) は、母方の親戚の海軍少佐サックリング (Suckling, Maurice 1725–1778) の縁故で⁹⁾、12歳で海軍少尉候補生となり、1773年に北極探検船 *Carcass* 号でスピッツベルゲン諸島沖へ航海し、その後、輝かしい軍功を重ねた。『フランケンシュタイン』の第3版が刊行される1831年に、*Beagle* 号の艦長となり、ダーウィン (Darwin, Charles Robert 1809–82) と共同で *Beagle* 号の報告記を書くことになるフィッツロイ (FitzRoy, Robert 1805–65) は、首相も務めた第三代グラフトン公爵 (FitzRoy, Augustus Henry, third duke of Grafton 1735–1811) を祖父に持ち、ハーロウ校から英国海軍兵学校 (Royal Naval College) に進み、十代後半で洋上勤務を始め、気象学者としても功績を残した。ウォルトンは、彼らとは対照的に、早くに親を亡くし、門閥に属することも、組織に属することなく、専門知識を独学し、民間船で調査探検に出る。

ウォルトンは、フランケンシュタインと異なり、文学的な感性を持っている。父の遺言で海への憧れを断たれた後、詩の美しさに目覚め、詩人を目指す。

I perused . . . those poets whose effusions entranced my soul, and lifted it to heaven. I also became a poet, and for one year lived in a Paradise of my own creation; I imagined that I also might obtain a niche in the temple where the names of Homer and Shakespeare are consecrated. You are well acquainted with my failure, and how heavily I bore the disappointment. (vol. 1, letter 1. 6–7)

しかし、自分には詩的才能がないことを知り、再び落胆する。ところが、ちょうどこの時、従兄の遺産を相続することになり、再び海へと関心を向けることになる (vol. 1 letter 1.

7)。後見人の叔父や父の遺言に拘束されない成人の年を迎え、従兄の財産を相続すると、ウォルトンは、自分の財産を自由に使って、自分のしたいことができる立場になった。彼は、北極探検に向けて、6年かけて専門知識を学び、グリーンランドの捕鯨船での実地訓練(“twice I actually hired myself as an under-mate¹⁰⁾ in a Greenland whaler”)を経て、豊富な資金を使って北極探検の船を購入し、乗組員を雇い、探検の航海に出る(vol. 1. letter 1. 7)。

28歳となり満を持して自分の船で北極探検に出たウォルトンは、船上で、自分に欠如しているものに気が付く。2通目の手紙で、船上での深い孤独の中で自己を振り返って、独学のために偏ってしまった自分の学識を嘆き(“Now I am twenty-eight, and am in reality more illiterate than many school-boys of fifteen”)、自分を理解し共感し導いてくれる友人を切望し、そのような自分の性格を“romantic”と形容している(vol. 1, letter 2. 9, 8)。この“romantic”という形容詞に、ヴィクトリア朝時代に一般的となる「イギリス・ロマン派的な」という意味を少し時代に先駆けて読み込むとすれば、“romantic”な性格と友情は切っても切れない関係にある(“You may deem me romantic, my dear sister, but I bitterly feel the want of a friend” [letter 2. 8-9])。

民間船を指揮して北極航路発見と磁力の解明を目指す28歳のウォルトンは、探検の航海の指揮を執る一方で様々な科学的な実験を行った海軍士官や、探検の航海を任務とする軍船に民間人として乗船した科学者たちと重なる部分があり、また、国家的なプロジェクトとしてではなく探検、調査が行われる次の世紀以降の状況を先取りした部分があるとも言える。ヴィクター・フランケンシュタインの生命の創造は、現代の読者も当時の読者も、不可能、あるいはかなり遠い未来なら可能かもしれない話と感じるだろうが、ウォルトンに関しては、1818年の初版出版当時の読者たちにとって、同時代にあり得たかもしれないと思わせる要素がかなりあるように造型されている。ウォルトンにはなかった友情や学識を、18世紀後半から19世紀前半の調査探検の航海で重要な役割を果たした歴史上の人物たちは持っていただろうか。『フランケンシュタイン』と18世紀後半の実例と19世紀前半の実例を以下で比較考察してみる。

- 1) バンクス(Banks, Sir Joseph, baronet 1743-1820)とフィップス(Constantine John Phipps, second Baron Mulgrave in the peerage of Ireland and Baron Mulgrave in the peerage of Great Britain, 1744-92)

巨万の遺産を手に入れて民間船と乗組員を雇い、北極探検に向かうウォルトンの先例的な人物として、民間人として自分の調査チームの経費も負担して海軍の探検船*Endeavour*号に乗り込んだバンクスがいる。だが、バンクスの調査探検の航海には、イートン校時代からの親友で、やはり科学に関心を持ち、1773年に北極探検の指揮を執ることになる海軍士官フィップスの大きな助力があった。

フィップスは貴族の名家の長男として生まれ¹¹⁾、バンクスも裕福なジェントルマン階級の出身であった。二人はイートン校で友情を育んだ。フィップスは、1758年にイートン校を離れ、1759年1月、叔父の海軍大佐ハーヴェイ (Hervey, Augustus John, third earl of Bristol, 1724–79) の庇護の下に cadet (貴族階級出身の幹部候補生) として海軍軍人としてのキャリアを歩み始める。学業を続けたバンクスは、1761年に父が死ぬと、潤沢な資金を使って自然哲学の研究、特に植物学の研究に邁進する。1763年のパリ条約で、ラブラドルとニューファウンドランドが正式にイギリスの領有地となると、1764年、ニューファウンドランド総督兼海軍総司令官となったパリサー (Palliser, Sir Hugh, first baronet, 1723–1796) は、1765年から66年にかけてクック (Cook, James 1728–79) に沿岸の測量をさせ、1766年には、ニューファウンドランドの調査ノートの提出という条件と引き換えに旅券を発行したモラヴィア兄弟団4名を、フリゲート艦 *Niger* 号でシャトー湾まで護送した¹²⁾。*Niger* 号の「乗客」はモラヴィア兄弟団の宣教師たちだけではなく。当時23歳のバンクスが、民間人として *Niger* 号に乗船した。乗組員、乗客の中で唯一の自然科学者であった。バンクスを *Niger* 号に乗船させるために奔走したフィップスも乗船している。

フィップスは、海軍軍人として *Niger* 号に乗船したと通常は考えられているが、ライサット (Lysaght, A. M. 1905–1981) が徹底的な調査を行い、*Niger* 号の総員名簿 (muster roll) と航海日誌 (log) に彼の名前が出てこないことから、1767年に休職してバンクスとともに「乗客」としてラブラドルに向かったと結論づけている (61)¹³⁾。そうだとすれば、フィップスはイートンで育んだ友情から休職してバンクスの調査に付き合うことにし、若い二人は、1765年から66年の冬に航海の準備をし (Lysaght 45)、北の果ての土地での調査探検を主目的として自由な立場でラブラドルに向かったということになる。

バンクスとフィップスの *Niger* 号での航海には、おそらく、サンドウィッチ (John Montagu, 4th Earl of Sandwich, 1718–92) の助力もあった。バンクスとサンドウィッチの関係は、リンカンシャーのレベスピィ・アベイの郷紳を父 (Banks, William 1719–1761) に持ったバンクスの少年時代に遡る。バンクスは、リンカンシャーに地所を所有していたサンドウィッチと釣りに行っており、父が亡くなり、母がロンドンのチェルシーに居住地を移した1761年以降は、やはりチェルシーに住んでいたサンドウィッチとしばしばテムズ川の夜釣りに出かけている (Lysaght 45)。サンドウィッチは、浮沈の激しかった政治家であるが、1744年に海軍省に入り、海軍の様々な改革を牽引し、1748年に海軍第一卿に就任して以来、何度かこの職についており¹⁴⁾、フィップスの叔父ハーヴェイとも親しかった。このような海軍上層部のコネクションの中で、若い二人は、1766年4月22日プリマス湾からラブラドルへと出発した。バンクスは、この航海中に、妹のセアラ (Banks, Sarah Sophia, 1744–1818) に手紙を書き送っており、セアラは、兄の航海の簡単な旅程をメモに残している (Lysaght 263)¹⁵⁾。

Niger号での航海と現地調査は、バンクスにとっては、*Endeavour*号航海(1768-71)のための準備経験となり、フィップスにとっては、1773年の*Racehorse*号と*Carcass*号を率いての北極海探検の任務へとつながった¹⁶⁾。フィップスは、北極は氷がなく太平洋へのより迅速なアクセスが可能はずという当時の理論の検証と太平洋へと至る航路を発見することを命じられた¹⁷⁾。フィップスたちは、スヴァールバル(スピッツベルゲン)諸島の最北端まで到達するが、氷に阻まれて9月に引き返した。探検隊の任務としては失敗だが、北極海の科学的調査の成果は多く、*A Voyage towards the North Pole: Undertaken by His Majesty's Command, 1773* (1774)に纏められた。

2) スコアズビー父子 (Scoresby, William, senior, 1760-1829; Scoresby, William, junior, 1789-1857)

「科学」が誕生しつつあった18世紀後半から19世紀前半、まだヨーロッパ人の足跡が残されていない地域への調査探検隊の派遣は、科学と国家権力(海軍)との密接な結びつきの中で行われていた。しかし、イギリスは1793年からフランスと長い戦争状態に入り、戦争終結後まで調査探検は再開されない。その一方、北の海で漁業に携わる人々、特に捕鯨船の船主や乗組員たちは、戦争中も漁業を続けており、その中には、商業的発展と航海術、科学技術の発展が不可分であることに目を向け、科学と技術革新に力を入れる船員たちがいた。国家権力や貴族階級とは無縁のところ、家柄も縁故もない普通の人々が、自身の才能と学問的研鑽によって技術革新を成し遂げ、学術のネットワークに参入し、新しい分野を開拓していくようになる。文学研究者があまり注目しない“whalers”もそのような科学技術革新には貢献しており、『フランケンシュタイン』の外枠のウォルトンの物語と興味深い対照を示す例として、スコアズビー父子がいる¹⁸⁾。

ウィリアム・スコアズビー(シニア)は、イングランド北東部の港湾都市ウィットビー郊外のクロプトンの小さな農家に生まれたが、19歳の時に航海術を学び、商船の船長付きの実習生からスタートして、グリーンランド沖の捕鯨業で頭角を現した。優れた観察眼と航海術によってスコアズビー(シニア)は、1790年には船長となり、早くから自分と同名の長男ウィリアムを自分の船に乗せた。1799年、10歳のウィリアム・スコアズビー(ジュニア)は、父の船で初めて北極に行き、1803年、14歳になると、父が船長となった*Resolution*号の船長付きの見習い生となった。*Resolution*号は、毎夏グリーンランド沖で捕鯨を行い、多大な利益を上げるが、スコアズビー父子は、商業的な目的と科学的な航海技術の発展の両方を追求する。当時、グリーンランド沖での捕鯨には、正確な緯度の計測の問題と高緯度での磁気コンパスの不正確さが付きまとい、グリーンランドからの帰国の時の方が危険が大きかった。スコアズビー(ジュニア)の航海日誌、後に纏められた科学論文ではこの問題の解決が模索されていたことが示されている(Jackson, 1: lvi)。

1806年、一等航海士 (chief mate) となったスコアズビー (ジュニア) は、父の指揮下に、*Resolution* 号を北極点から 500 マイルの地点である北緯 81 度 30 分まで進めた。当時、船が到達した “furthest north” であった (Scoresby Jr., *An Account of the Arctic Regions* 1: 42–46; Scoresby-Jackson 28–29)¹⁹⁾。この年の秋、スコアズビー (ジュニア) は、エディンバラ大学で学ぶ決意をし、父は息子の決意を最終的には支持し、財政的な援助をした (Scoresby-Jackson 32)²⁰⁾。エディンバラ大学は、当時、自然科学の分野で非常に優れた研究者を擁していたのみならず、1 対 1 のチューター制ではなく、学生たちが有名な教授たちの講義を自由に受講できるシステムであった (Birse 45–46)。ヴィクターと同様、17 歳で大学に入ったとき²¹⁾、スコアズビーは全く孤独であった。“In Edinburgh I was an entire stranger — and as strangers, not introduced, are received with extreme caution by the inhabitants, I formed very few acquaintances” (Scoresby-Jackson 33)。しかし、徐々に知り合いを作ったスコアズビーは、プレーフェア (Playfair, John 1748–1819) から朝食に招かれたときに捕鯨船で彼が観察したことをプレーフェアに話したことがきっかけとなり、プレーフェアと文通を始める (Scoresby-Jackson 33–34)。エディンバラは、最新の科学的知識や調査の手法を学ぶ場だけでなく、学問的なネットワークと友人を手に入れる場となるのである。

スコアズビーは、1807 年の春、*Resolution* 号に乗船するためにエディンバラを去るが、船がウィットビーに帰還した後、父の知り合いであったバンクスの朝食会に招かれる。その後、バンクスの気象学関係の学術誌に成果を載せ始め、また、バンクスが死ぬまで文通を続けることになる (Scoresby-Jackson 66–67)。1809 年の秋、もう一度エディンバラ大学に戻ったスコアズビーは、1804 年から自然哲学の教授となっていたジェイムソン (Jameson, Robert, 1774–1854) の自然哲学の授業を受講した。

In taking out my ticket for admission to the natural history class, Professor Jameson inquired my object in attending the University, and the profession for which I was designed. He was surprised when I announced myself as a sailor (being, I daresay, the only one in the College), and still more so when he understood my usual voyage was to the whale fishery of Spitzbergen. This led him to make many inquiries respecting the natural history of the Polar Sea, and especially of the whale. When I informed him that I had drawn up descriptions of the whale, and had kept regular meteorological journals for two or three years, he expressed such an interest in these things that I ventured to offer for his inspection the book in which my observation were recorded, an offer which he seemed eager to embrace. (Scoresby-Jackson 72)

この最初の出会いを発端とするジェイムソンとの終生に及ぶ深い友情と研究者としての連帯は、僅かな期間しか大学に在籍しなかったスコアズビーが大学で得た最大の恩恵であった。1810 年 2 月に、捕鯨のためにわずか 4 カ月で大学を去ることになったスコアズ

ビーは、“I quitted it enriched by the friendship of some of the most eminent men of science in the Scottish metropolis”と回想している (Scoresby-Jackson 75)。この年、スコアズビーは、ジェイムソンが主催するエディンバラのウェルナー学会のメンバーに選ばれ、その学会誌にいくつか論文を発表する。ジェイムソンは、のちに *An Account of the Arctic Regions* となる研究を纏めるようにスコアズビーに勧め、この著作には、ジェイムソンへの献辞がつけられた。

1810年、スコアズビー父子は、*Resolution*号で二人一緒の最後の航海をし、同年10月、スコアズビー(ジュニア)が21歳になると、父は、息子に *Resolution*号の船長の座を譲った。船長となった最初の航海で、スコアズビー(ジュニア)は、気象学者ハワード(Howard, Luke 1772–1864)の雲の分類法を使った。ハワードの雲の命名法と分類法を初めて航海で応用した例である。ハワードが1802年にロンドンで口頭発表した“On the Modification of Clouds, and on the Principles of their Production, Suspension and Destruction”は1803年の *Philosophical Magazine* に掲載された。1798年創刊の *Philosophical Magazine* は、当時、物理、化学、植物学、地質学などへと細分化しつつもその領域を広げていた「自然哲学」の論文、発見について自国のもののみならず海外の最新の論文の翻訳を掲載し、王立協会の *Philosophical Transaction* よりも多くの読者を獲得していた。その読者の中には、学問的な知識により技術革新をさらに進めようとする技術者や専門職の者も文学者もいた。スコアズビーはエディンバラの図書館でハワードの論文を読んでいるが、ウォルトンもまた一人で論文を読んで知識を深めただろう。独訳を読んだゲーテ(Goethe, Johann Wolfgang von 1749–1832)は、“Howards Ehrengedächtnis”(“In Honor of Howard,” 1821)を書き、PBSは、イタリアの空を観察して“The Cloud”(1820)を書いた。この時代の文学と科学は、ともに自然現象に大きな関心を寄せ、文学と自然科学の間の境界はほぼなかったのである。

スコアズビー・ジュニアの場合は、門閥も縁故もなかった一介の鯨取り漁師が己の才能と技量を鍛えることで捕鯨と科学の世界に地歩を築いてゆく。18世紀的な貴族や門閥の時代とは違う、フランス革命後の新しい時代の自己形成の一つのモデルと言える。ウォルトンと異なり、父に導かれて捕鯨業に入り、新しい知識を求めて大学に行くことによって、当時最高の科学者たちとの親密な関係を構築した。民間人による北極探検は、彼もウォルトン同様に望むことだった。フランスとの長い戦争の終結後、スコアズビー(ジュニア)には、北極探検船を率いる機会が訪れるだろうか。

3) スコアズビー・ジュニアとイギリスの北極探検の再開

1793年の英仏開戦以後もグリーンランド沖で漁を続けたイギリスの捕鯨船は、フランスの軍艦、私掠船に襲われ、1806年には、フランスの軍艦が捕鯨船を北極の氷の海まで追撃している(Lubbock 170–79; Intro, Scoresby 1: xlviiii)。また、1812年からはアメリカと

の戦争が始まり、アメリカの軍艦、私掠船が、イギリスの捕鯨船を襲うようになる。イギリス海軍はこの海域の巡視、特に帰国の途につく捕鯨船を護衛したが、1814年には、アメリカの私掠船がアルハンゲリスク——ウォルトンの第2の手紙の投函地であり、第3の手紙は、この港を出帆し故郷へ向かうイギリスの商船に託される (vol. 1. letter 2. 8, letter 3. 11) ——から帰るイギリスの船を襲った記録が残っている (Lubbock 193)。

戦時中も毎夏捕鯨と科学的観察を続けていたスコアズビーは、1813年から1817年の *Esk* 号での北極への航海のときに、北極の気象、海洋研究でいくつかの大きな発見をした。バンクスに宛てた1817年9月22日の手紙で、スコアズビーは1817年の夏の北極の氷の量が少ないことを報告している (*The Letters of Sir Joseph Banks: A Selection, 1768–1820* 329)。 *The Letters of Sir Joseph Banks: A Selection, 1768–1820* の編者の Neil Chambers は、この部分の註として、バンクスからの返信に対してスコアズビーが10月2日に書いた長文の返信に氷の量について詳細な報告があったことを明らかにしている (*The Letters of Sir Joseph Banks* 329–30 n.1)²²⁾。バンクスは、1817年11月20日に、海軍第一卿ダundas (Dundas, Robert Saunders, 2nd Viscount Melville, 1771–1851) にスコアズビーの調査の数値を根拠として、“the general benefit of mankind” のためにも、北極海への探検の航海を提案し、フィップスの北極探検がロイヤル・ソサエティからの提案だったことにも言及して手紙を結んでいる (*The Letters of Sir Joseph Banks* 354–55)。

Chambers がこの手紙につけた註によれば、ダundasは10月12日に、海軍の調査探検隊を2つ派遣しようと述べており (*The Letters of Sir Joseph Banks* 354 n.2)、北極海探検の再開は実現味を帯びる。スコアズビー (シニア) は、息子の北極海調査探検のために、*Fame* 号を購入した。しかし、フランスとの長い戦争の間中断されていた北極海探検が再び可能になった1818年、バンクスと親交があった海軍省次官バロー (Barrow, Sir John, first baronet, 1764–1848) は、北西航路発見とイギリスの帝国主義的進出、さらには軍役を解かれた海軍軍人たちの活躍の場の確保の全てを結びつけるために、1818年1月、2つの海軍主導の調査探検隊を編成した²³⁾。スコアズビー父子の夢はここに潰え、民間人による北極への調査探検隊は実現しない。1818年1月出版の『フランケンシュタイン』のウォルトンの物語は、歴史的事実と異なる軌跡を描く。現実では潰えたたたき上げの科学者の夢は、海軍とも戦争とも関係のないところで実現し、しかし、失敗するのである。

スコアズビー (ジュニア) は、探検船を主導できなかったことで悲しみにくれたりせず、科学論文を書き続け、北極の海洋研究の第一人者となる。1819年には、エディンバラのロイヤル・ソサエティの会員に選出された。1820年に *An Account of the Arctic Regions* を出版してヨーロッパ中で注目を集め、1823年、*Journal of a Voyage to the Northern Whale-Fishery* を出版し、彼は北極の科学的研究についての権威者となるのである²⁴⁾。

19世紀前半の北極探検は、商業的・植民地主義的拡張を視野に入れた北西航路の発見

と北極海の科学的な調査という 18 世紀後半以来の目的で続行される。バローは、1818 年の 2 つの調査探検隊がほぼ成果をあげずに帰国した翌年の 1819 年にも 2 つの調査探検隊を派遣した。どちらも、1818 年の調査探検隊に参加した若い海軍士官が指揮を執り、パリー (Parry, Sir William Edward 1790–1855)²⁵⁾ が率いた調査探検隊は、北西航路発見のために 5 月に出発し、メルヴィル島で越冬し、1820 年 11 月半ばに多くの科学的成果をもって帰還した。その記録は、*Journal of a Voyage for the Discovery of a North-West Passage from the Atlantic to the Pacific; Performed in the Years 1819–20* として 1821 年に出版された²⁶⁾。

ジョン・フランクリンに率いられた調査探検隊は、カナダ北西部から北極海に注ぐコッパーマイン川以東の北側の部分の探検を命じられた。北海に臨むリンカンシャーに生まれたフランクリンは、ウォルトンと同様に少年時代から海への憧れを抱き、海軍入隊の前に商船に勤務していた。ウォルトンとの違いは、5 月に出帆した *Prince of Wales* 号のフランクリンの配下には、船医兼自然科学者のリチャードソン (Richardson, Sir John 1787–1865) がおり、リチャードソンが、フランクリンに終生忠誠心と友情を持ったことである。ナポレオン戦争終結後の海軍による調査探検隊の編成には、気象データの分析や商業的に役立つ動植物の標本の作製などの自然科学者の任務を兼務できる船医が必要となった。1816 年に黄熱病に関する論文で医学の学位を修めていたリチャードソンは、ジェイムソンを含むエディンバラの教授たちの推薦を得、リチャードソン自身も調査探検隊への参加を先端の科学研究者たちと関係をつける機会と考えた。

探検隊は、3 年間の非常に過酷な行程と食料・物資の欠乏に耐えて 1822 年秋に 5500 マイルを走破して帰国した。戦争が終わり、イギリスが新しい英雄と危険や困難に立ち向かうノブレス・オブリージュの物語を渴望していた時、フランクリンは国家的英雄となった。探検の科学的成果はほとんどなかったが、リチャードソンも重要な自然科学者としての地位を得る²⁷⁾。ジョン・フランクリンの *Narrative of a Journey to the Shores of the Polar Sea, in the Years 1819, 20, 21, and 22* (1823) は、非常によく読まれ、旅行記の古典とみなされた²⁸⁾。

スコアズビー (ジュニア) は、北極の気象学、海流の研究、氷山の研究、磁気学などにおいて多くの重要な科学的発見をし、また、科学実験装置をいくつも考案した。彼の研究は、学術的にも、また航海技術の実用的な進歩にも大きく寄与した。ウォルトンが北極への航海の途上で望んでいたことを実際に行った歴史上の人物であるとも言える。だが、上述したように、スコアズビー (ジュニア) は、ウォルトンと多くの点で対照的であった。民間人であったスコアズビー (ジュニア) は、北極圏の科学の分野で成功を収めた。1818 年から 1820 年代前半に何度も北極圏へと調査探検の航海に出た海軍士官たちは、華々しい戦功をたてる英雄に代わって、前人未到の地を目指す堅忍不拔の英雄として故国に凱旋した。想像を超える苦難の体験の中で、艦長と船医兼自然科学者の間には友情の絆が芽生えた。Adoriana Craciun は、18 世紀後半のイギリスの北極探検は、北極

点は氷がないという俗説を信じた“the voyages of delusion”であり²⁹⁾、科学的な調査探検の起点を1818年に置き、(フィクションである)『フランケンシュタイン』がジョン・フランクリンの探検記のナラティブに与えた影響について論じている(5-6, 82-123)が、筆者は、本論では、調査探検を行った科学者たちの科学的知識ではなく、彼らの人間関係、特にウォルトンが渴望した友情に焦点をあてている。その点で、Craciunのようにテキストの編集の仕方の影響関係ではなく、フランクリン隊の隊員たちの体験とウォルトンの航海の体験の違いを強調しておきたい。生還した彼らは、ウォルトンが手に入れられなかった名声と友情を得る。現実と小説世界の中のこの驚くべき対比は、この作品が書かれた時代よりも後の時代の読者に、何故科学者の失敗が科学の進歩を夢見る時代に書かれ、科学者が英雄になることが阻まれるのか、1816年以降に付け加えられたウォルトンの物語を詳細に再検討するように強く促すのである。

III. 人生の物語を聞くこととプロメテウスの人間化

北極探検はヴィクトリア朝半ばまで続けられ、フランクリン隊の遭難という形で中断するのだが、長い調査探検の航海の中、全ての指揮を任される孤高の若い艦長の過酷な精神的重圧のケアは、*Frankenstein* の第3版が出版された1831年、南洋航海を命じられた26歳の*Beagle*号艦長フィッツロイの要望という形で、おそらく初めて公的な対応がなされることになる。19世紀前半には、船医は外科医(surgeon)であり、外科的な処置を行うだけであった。その社会的身分は低く³⁰⁾、船長の相談相手、まして、友人という立場になることはあり得なかった。『フランケンシュタイン』でも、ウォルトンの船にいるのは外科医(surgeon)であり、医者は9月12日の最後の手紙まで言及されないし、その時も鎮静剤を与えているだけである(“The surgeon gave him a composing draught, and ordered us to leave him undisturbed” [vol. 3 p. 185])。

1828年、前任の艦長の自殺のため艦長に昇格したフィッツロイは、見習士官と水兵だけを相手に、長く過酷な任務を遂行しなくてはならない立場にあった。フィッツロイは、教養ある話し相手を海軍省に要望し、海軍省はその要望を受け入れ、ケンブリッジの教授たちに人選を頼み、22歳のダーウィン(Charles Robert Darwin, 1809-1882)³¹⁾が選ばれた。ダーウィンは父に高額の支度金を工面してもらい、民間人として自費で乗船し、長い航海の間、フィッツロイの唯一の友人となるのである³²⁾。

1818年1月の『フランケンシュタイン』の出版後、シェリー一家は、MWSの義理の妹クレア・クレアモント(Claire Clairmont, 1798-1879)とともに、3月11日にイタリアに発ち、MWSが再びイギリスの地を踏むのは、夫の思いがけない遭難死の約一年後の1823年7月である。MWSはフランクリン隊の帰還の時はイギリスにはいなかったが、後にウィンターソン(Jeanette Winterson, 1959-)が野心作*Frankissstein* (2019)でしたように³³⁾、

イギリスの科学的調査探検の航海の現実がウォルトンの物語とは違う方向に向かってもウォルトンの物語を変更することはなかった。彼女の文学的な想像力は、現実を追認することよりも、ヴィクター・フランケンシュタインとは別の道を進むイギリス人ウォルトンの失敗に、イギリスの、あるいは科学の(近未来ではなく)かなり先の未来を見据える別のメッセージをこめたのではないだろうか。

ウォルトンの人生と彼の北極への熱情が象徴するのは、イギリス・ロマン主義の、また、当時のイギリスの植民地主義とそれと結びついた科学の発展の、「現代のプロメテウス」を目指す男性中心主義的な野心である。フランケンシュタインが生命の創造を目指すことは、人間以上のものになろうとする「現代のプロメテウス」の神の領域への究極の侵犯であり、フランケンシュタインの物語を聞くウォルトンは、フランケンシュタイン的な偉業への野心の凡庸なイギリス的ヴァージョンと言うこともでき、またそう考えられてきた。例えば、現代の生命倫理学の観点から『フランケンシュタイン』を論じる Paul Root Wolpe は“Knowing and Seeing: Reconstructing Frankenstein”で、この作品が21世紀のバイオテクノロジーの分野のいくつもの大きな問題に対する驚くべき洞察に満ちているという一方で、ウォルトンについては、“the unsuspecting public, the ultimate consumer of science”の代表であると切り捨てている(420–21)。しかし、ウォルトンの造型は、21世紀末を舞台にしているMWSの第二作『最後の人間』(*The Last Man*, 1826)ほど遠い未来ではないが、「現代のプロメテウス」のあり方への異議の提示である。ウォルトンの人物像が、18世紀後半の調査探検隊のリーダーたちやバンクスやスコアズビーなどの自然科学者たちとは異なり、また、ウォルトンが作品の最後とする決断は、シェリー一家がイギリスを去った後の1820年代前半のイギリス海軍による北極探検を担った海軍士官や科学者たちと鮮やかな対比をなすことは偶然ではないのだ。

『フランケンシュタイン』は、三人の語りが入れ子構造になっている特殊な構成を取っている。これまでの研究では、内側の2つの語り——フランケンシュタインの語りと、その中に埋め込まれている彼に創造され、名前も付けられずに遺棄された「^{クリーチャー}被造物」の語り——に焦点が当てられ、3層の一番外側で、ヴィクターの物語を聞き取り、「^{クリーチャー}被造物」とも言葉を交わし、全てを記録し、イギリスに(あるいは後世に)伝えるウォルトンの重要な役割にはあまり光が当たらなかった。輝かしい「現代のプロメテウス」たちが活躍し、素晴らしい科学の未来が予見されていたとき、『フランケンシュタイン』は、生命を人工的に創り出し神の領域を犯したジュネーヴ人の「現代のプロメテウス」の失敗と死の物語を語る。その物語を記録するイギリス人のウォルトンは、「現代のプロメテウス」の「^{クリーチャー}被造物」の殺害という死の直前の懇願を受け入れず、探検調査がもたらす科学的業績と栄光を断念して乗組員の人命を優先し、「現代のプロメテウス」にならない決断をする。

ウォルトン自身はまだこの決断を受け入れる力がないのだが(“It requires more philoso-

phy than I possess” [vol. 3. 184])、この苦渋の決断は、ウォルトンがフランケンシュタインの語りの中で“*How dare you sport thus with life?*”と叫ぶ名前の無い「被造物」の悲痛な声を聞いたことと無縁ではない (vol. 2. ch. 2. 77)。そして、ウォルトンは、フランケンシュタインが息を引き取った後、「被造物」の恐ろしさを眼前に見ながらも話しかけることができた唯一の人間となる。このようなウォルトンが、作品の一番外枠の、つまり、現実の世界と一番接点がある語り手として、フランケンシュタインの物語の語り手、報告者となっていること、また自分の物語を語っていることの意義は大きい。

氷海から救助され名前も明かさないうフランケンシュタインを介抱し、その物語を聞き、フランケンシュタインの語りの中に埋め込まれた「被造物」の声も聞き取ったウォルトンは、おそらく、20世紀後半になって医学と文学の共同の領域として確立し始めた「物語医療学」(narrative medicine)の、患者の語りに耳を傾け、患者の全体を理解し、治療するのではなく「看護する」医者——そして患者から学ぶ医者——の萌芽的な存在と考えられる。ウォルトンの第2の手紙で、彼は不屈の意志で北極航路を発見しようとする科学者である一方、詩的な感性を持ち、“romantic”な性格であることが明かされていた (vol. 1. letter 2. 8-9)。このように造型されたウォルトンは、フランケンシュタインとその親友クラヴァル (Henry Clerval) を融合させたような人物である。生命を創造した後、その醜怪さに耐えられず創造したものを遺棄して病気になったフランケンシュタインを辛抱強く看病したクラヴァル同様に、ウォルトンは、氷海で遭難しかかったヨーロッパ人 (フランケンシュタイン) を救助して優しく介抱し、救助された人物が自分について語り出すまで辛抱強く待った。その一方で、ウォルトンは、助けられても名前さえ明かさないうイギリス人ではない謎の人物に、自分のこれまでの人生や悩みを打ち明けている。ウォルトンの物語を聞くことで、フランケンシュタインは、クラヴァルにはついに打ち明けることができなかった「被造物」のことをウォルトンに語るができるようになる。そして、フランケンシュタインの語りの中で、「被造物」の苦しみを知ったウォルトンは、その“romantic”な性格ゆえに、科学者フランケンシュタインがなし得なかったことを、科学的な成功や栄光とは別のところで、人間以上のものにならなかった「現代のプロメテウス」としてなそうとしている。死すべき運命の人間の苦しみが、個人の人生の物語として語られ得る場を作り、その物語を全力で聞くのである。

『フランケンシュタイン』の冒頭で、ウォルトンは、孤独に苦しみ、己の不完全さを「高貴な」友人を得ることで埋めようとする欠点の多い人物として登場する。彼は、フランケンシュタインの語り、その中の「被造物」の語りを聞くこと、それを書き留めることで、自分の“romantic”な性格を「現代のプロメテウス」の人間化へと向けて陶冶する。この点で、ウォルトンの科学者としての失敗は、イギリス・ロマン主義的な精神が「現代のプロメテウス」を人間化することと表裏一体となり、「現代のプロメテウス」にならないイギリス人の成長の途上の姿を示すことになる。「現代のプロメテウス」の人間化

は、神と見紛う英雄の失墜となるが、ウォルトンは、天上の火を取らない苦渋の中からのみ生まれる新しい哲学、「被造物」の語り^{クリエーター}に耳を傾ける聞き手が得られるかもしれない死すべき運命の者のみ^{クリエーター}が手にできる哲学を模索することになる。ウォルトンは、コウルリッジ (Samuel Taylor Coleridge, 1772–1834) の老水夫のように聞き手にその邪眼と語りの力で無理やりに自己の話^{クリエーター}を聞かせる語り手にはならない。人間の精神の“romantic”な部分が、孤独の中で孤独な魂が紡ぎ出す語り^{クリエーター}に真に耳を傾け、共鳴し、失敗と引き換えに「人間であること」、「人間的であること」を選び取るとき、人間となった「現代のプロメテウス」のための哲学を模索する道は、20世紀の「物語医療学」(narrative medicine)へとつながるように思える³⁴⁾。この観点からウォルトンを分析することは、現在ますます必要である科学(医学)と人文学(文学)との協働作業のために非常に重要であるが、大きな問題であるので、また稿を改めて論ずることにしたい。

A Select Biography

- Alvey, Nahoko Miyamoto. *Strange Truths in Undiscovered Lands: Shelley's Poetic Development and Romantic Geography*. U of Toronto P, 2009.
- Austen, Jane. *Jane Austen's Letters*. Ed. Deirdre Le Faye. 4th ed. Oxford: Oxford UP, 2011.
- Baehre, Rainer K. Introduction. *Outrageous Seas: Shipwreck and Survival in the Waters off Newfoundland, 1583–1893*. Montreal: McGill-Queen's UP, 1999. 1–62.
- Banks, Joseph. *Joseph Banks in Newfoundland and Labrador, 1766: His Diary, Manuscripts, and Collections*. Ed. A. M. Lysaght. U of California P, 1971.
- . *The Letters of Sir Joseph Banks: A Selection, 1768–1820*. Ed. Neil Chambers. Forward by David Mabblerley. Introduction by Harold Carter. Imperial College P, 2000.
- Barrow, John. *A Chronological History of Voyages into the Arctic Regions: Undertaken Chiefly for the Purpose of Discovering a North-East, North-West or Polar Passage between the Atlantic and Pacific*. London: Murray, 1818.
- Birse, Ronald M. *Science at the University of Edinburgh, 1583–1993: An illustrated History to Mark the Centenary of the Faculty of Science and Engineering 1893–1993*. Faculty of Science and Engineering, University of Edinburgh, 1994.
- Charon, Rita. *Narrative Medicine: Honoring the Stories of Illness*. Oxford UP, 2006.
- Coffey, Bysshe Inigo. “Shelley's Kant, Wordsworth, and Peter Bell.” *The Wordsworth Circle* 49.3 (2018): 167–76.
- Craciun, Adriana. *Writing Arctic Disaster: Authorship and Exploration*. Cambridge UP, 2016.
- Coleridge, Samuel Taylor. *Coleridge's Poetry and Prose*. Selected and edited by Nicholas Halmi, Paul Magnuson, and Raimonda Modiano. Norton Critical Edition. Norton, 2004.
- Franklin, Benjamin. *The Papers of Benjamin Franklin*. Vol. 20: January 1 through December 31, 1773. Ed. William B. Wilcox. Yale UP, 1976.
- Jackson, C. Ian. “Introduction” *The Arctic Whaling Journals of William Scoresby The Younger*. Vol. 1. The Voyages of 1811, 1812 and 1813. Ed. C. Ian Jackson. The Hakluyt Society, 2003. xxi–lxi.
- Jones, Therese, Delese Wear, and Lester D. Friedman, ed. *Health Humanities: Reader*. Rutgers UP, 2018.
- Kant, Immanuel. *Natural Science*. Ed. Eric Watkins. Cambridge UP, 2012.

- Laughton, J. K., and A. K. Parry. "Parry, Sir (William) Edward (1790–1855), Naval Officer and Arctic Explorer." *Oxford Dictionary of National Biography*. January 03, 2008. Oxford UP. Date of access 28 Sep. 2019, <<https://www.oxforddnb.com/view/10.1093/ref:odnb/9780198614128.001.0001/odnb-9780198614128-e-21443>>
- Lubbock, Basil. *The Arctic Whalers*. Glasgow: Brown, Son & Ferguson, 1937.
- Riffenburgh, B. A. "Franklin, Sir John (1786–1847), Naval Officer and Arctic Explorer." *Oxford Dictionary of National Biography*. October 04, 2012. Oxford UP. Date of access. 28Sep. 2019.<https://www.oxforddnb.com/view/10.1093/ref:odnb/9780198614128.001.0001/odnb-9780198614128-e-10090>
- Robinson, Charles, E. "Introduction." *The Frankenstein Notebooks*. Ed. Charles E. Robinson. 2 vols. Garland, 1996. Routledge, 2016. xxv–lxxv.
- Rodger, N.A.M. *The Insatiable Earl: A Life of John Montagu, 4th Earl of Sandwich*. Norton, 1993.
- . "Nelson, Horatio, Viscount Nelson (1758–1805), naval officer." *Oxford Dictionary of National Biography*. May 21, 2009. Oxford UP. Date of access 15 Sep. 2019. <https://www.oxforddnb.com/view/10.1093/ref:odnb/9780198614128.001.0001/odnb-9780198614128-e-19877>
- . "Phipps, Constantine John, second Baron Mulgrave in the peerage of Ireland and Baron Mulgrave in the peerage of Great Britain (1744–1792), naval officer and politician." *Oxford Dictionary of National Biography*. January 03, 2008. Oxford UP. Date of access 3 Aug. 2019. <https://www.oxforddnb.com/view/10.1093/ref:odnb/9780198614128.001.0001/odnb-9780198614128-e-22188>
- Scoresby, William, Jr. *An Account of the Arctic Regions, with a History and Description of the Northern Whale-Fishery*. Edinburgh: Constable, 1820.
- . *The Arctic Whaling Journals of William Scoresby the Younger*. Ed. C. Ian Jackson. 3 vols. London: The Hakluyt Society, 2003–2009.
- Scoresby, William, Senior. *Seven Log-Books Concerning the Arctic Voyages of Captain William Scoresby, Senior of Whitby, England*. Ed. Frederick S. Dellenbaugh. New York: The Explorers Club, 1917.
- Scoresby-Jackson, R. E. *The Life of William Scoresby M.A., D.D., F. R. S. S. L.&E., Corresponding Member of the Institute of France, etc* London: Nelson, 1861. 2016.
- Shelley, Mary. *The Annotated Frankenstein*. Ed. Susan J. Wolfson and Ronald L. Levao. The Belknap P of Harvard UP, 2012.
- . *The Frankenstein Notebooks*. Ed. Charles E. Robinson. 2 vols. Garland, 1996. Routledge, 2016.
- . *Frankenstein, or The Modern Prometheus: The 1818 Text*. Ed. Marilyn Butler. Oxford World Classics. Oxford UP, 1994.
- . *The Journals of Mary Shelley 1814–1844*. Ed. Paula R. Feldman and Diana Scott-Kilvert. The Johns Hopkins UP, 1987.
- Shelley, Percy Bysshe. *The Poems of Shelley*. Vol. 2. Ed. Kevin Everest, Geoffrey Matthews, Longman, 2000.
- Stockwin, Julian. *The Kydd Collection 1: (Kydd, Artemis, Seaflower)* Kindle Edition. Hodder & Stoughton, 2014.
- . *The Kydd Collection 2: (Mutiny, Quarterdeck, Tenacious)* . Kindle Edition. Hodder & Stoughton, 2014.
- Thomson, A. D. "Lysaght, Averil Margaret." 2000. *Te Ara: The Dictionary of New Zealand Biography*. <https://teara.govt.nz/en/biographies/5125/lysaght-averil-margaret>
- Winterson, Jeanette. *Frankissstain: A Love Story*. Jonathan Cope, 2019.
- Wolpe, Paul Root. "Knowing and Seeing: Reconstructing Frankenstein." Ed. Therese Jones, Delese Wear, and Lester D. Friedman. *Health Humanities: Reader*. Rutgers UP, 2018. 419–29.

小林章夫訳 『フランケンシュタイン』 メアリ・シェリー著 光文社、2010。
森下弓子訳 『フランケンシュタイン』 メアリ・シェリー著 東京創元社、1984

註

- 1) 第2版は、1823年に、匿名のまま、メアリ・シェリーの父のウィリアム・ゴドウィン (William Godwin 1756–1836) よって出版された。
- 2) Mary Shelley, *Frankenstein, or The Modern Prometheus: The 1818 Text*, 194. 本論文では、*Frankenstein* のテキストについては、イギリス・ロマン主義の時代に出版された初版の1818年版を用い、Marilyn Butler が編集した Oxford Classics のものを使用する。Oxford 版では、第3版の序文は、Appendix A として収録されている (192–97)。引用箇所については、巻、章と必要があればウォルトンの手紙の番号や題をページ数に加えて本文中に括弧に入れて示す。本論文では、パーシー・ビッシュ・シェリー、メアリ・ウルストンクラフト・シェリーという英文学史上稀に見る文学的カップルの両方に言及するので、二人に言及する最近の研究書の傾向に従って、原則として、パーシー・ビッシュ・シェリーを PBS、メアリ・ウルストンクラフト・シェリーを MWS とこれ以降表記する。
- 3) “Frankenstein” という固有名詞の様々な意味については *OED* の Frankenstein の項目を参照。“Frankenstein, n.” *OED Online*, 3rd ed., Oxford UP, June 2019. www.oed.com/view/Entry/74223. Accessed 27 August 2019.
- 4) 英語の sister や brother は長幼を表さないので、長幼は文脈で判断するしかない。『フランケンシュタイン』ではマーガレットの年齢は明かされないの、姉か妹かの手がかりはない。『フランケンシュタイン』の邦訳では、例えば、森下弓子訳も小林章夫訳も「姉」となっている。註5で後述するが、多くの研究者がすでに指摘しているように、MWS の頭文字を持つ Margaret Walton Saville に WMS 自身が重ねあわされているとすれば、詩人になることを一時夢見たウォルトンに PBS を重ねることも可能である。その場合、マーガレットは「妹」であってもよいと考える。
- 5) 『フランケンシュタイン』にはいくつかの草稿があり、Charles E. Robinson が草稿のファクシミリを *The Frankenstein Notebooks* としてまとめ、非常に詳細な “Introduction,” “Chronology” を付けている。ウォルトンの恐らく唯一の係累 Margaret Walton Saville の頭文字 MWS を、メアリが自分の頭文字とできるようになるのは、PBS との結婚が成立する 1816 年 12 月 30 日以後である。
- 6) フランクリンの電気に関する手紙は、内科医かつ植物学者のフォサーギル (John Fothergill, ?-1780) によって *Experiments and Observations on Electricity* として 1751 年に出版され、フランス語にも訳された。
- 7) カントが地震について論じた三部作の最後の論考。日本語では「地震再考」と紹介される。“Peter Bell the Third” (1819) で言及されるカントの主要作品のラテン語訳を出発点にして PBS のカント理解について論じた Coffey の綿密な調査を参考にすれば、1818 年以前に PBS と MWS がカントの自然哲学の論文を読んだ可能性は低いと推測されるが、言葉遣いは非常によく似ている。カントがフランクリンを「現代のプロメテウス」に擬えたことは広く知れ渡っていたので、二人が知っていた可能性は高い。
- 8) フランクリンの渾名「現代のプロメテウス」はずっと使われ続け、コンドルセ (Condorcet, Marie-Jean-Antoine-Nicolas de Caritat, Marquis de 1743–94) は、1773 年 12 月 2 日のフランクリンに宛てた手紙で、“lebonheur de voir le promethée moderne” と書いている (Benjamin Franklin 20: 490)。
- 9) サックリングは、ネルソンの母キャサリンの兄か弟である。Rodger が執筆した ODNB の項

目ではキャサリンは 1725 年誕生、サックリングは同年の 5 月 14 日誕生と書かれており、二人の長幼の順は確認できなかった。サックリングは“master and commander”であり、この階級は、イギリス海軍では captain の下で first lieutenant の上の位なので艦長 (commander) となることができた。

- 10) “under-mate” (「見習い航海士」) は、あまり使われない言い方である。“mate” は、1804 年に英国海軍では“sub-lieutenant”と呼称が代わり、以後は商船でのみ使われるようになった。OED の“mate” II.4, 5 を参照。ウォルトンは、“hired myself”と言っているのも、船のオーナーとなっていた可能性がある。
- 11) Phipps については、Rodger を参照。
- 12) 「ヨーロッパ人の意識には殆ど存在しなかった」(Baehre 11) 最果ての北の大地は、1760 年代、イギリス、フランス、アメリカが漁業権を主張して争い、モラヴィア兄弟団が布教活動を求め、ファースト・ネイションズとイギリスからの長期滞在者がせめぎ合う、様々な利害の対立が複雑に交錯する植民地活動の最前線となっていた。1760 年代のイギリスのラブラドルとニューファウンドランドへの商業的、政治的、軍事的拡大と PBS の“The Triumph of Life”との関係は Alvey 185–89 を参照。
- 13) A. M. Lysaght (Averil Margaret Lysaght) は、ニュージーランド生まれの動植物学者で、ロンドンで研究生活を送り、大学の常勤のポストに就けなかったためその業績は広く知られていないが、クックやバンクスの日記などの資料を編纂し、優れた科学的注釈を加えた。1948 年、ライサットは Alexander Turnbull Library で、バンクスがフィップスのために記録した *Endeavour* 号の航海日誌のトランスクリプトを発見し、ウェリントンの Victoria University College (現在の Victoria University of Wellington) 時代からの友人 J. C. Beaglehole にこの資料を渡した。出版社からすでにクックやバンクスの資料の編纂を依頼されていたビーグルホールは、ライサットに専門的な註をつけることを提案し、*The Journals of Captain James Cook* の最初の 2 巻 (1955, 1961)、*The Endeavour Journal of Joseph Banks* (1962) の注釈、バンクスのラブラドルとニューファウンドランドの調査航海の記録の綿密な編集と注釈がつけられた。
- 14) サンドウィッチは、ピット (Pitt, William, first earl of Chatham 1708–78) 内閣 (1766–68) とグラフトン (FitzRoy, Augustus Henry, third duke of Grafton 1735–1811) 内閣 (1767–70) では失脚した。
- 15) この記録は、National Library of Australia の“Banks Papers. SO9”の中の“Memorandums 13 Feb, 1775”である。“1776 April 7th. Mr. Banks set out from London for Plymouth wehre he embarked April 22d for Newfoundland and Labrador, and arrived safe at Lisbo in his way home Nov. 17, 1766. To the best of my remembrance he arrived at London, Jan. 30th 1767” (Lysaght 263)。
- 16) フィップスは、1770 年に海軍第一卿に返り咲いたサンドウィッチやパリサーなど海軍上層部の信任が厚く、また、叔父のハーヴェイも 1771 年に海軍省最高執行委員に出世していた。
- 17) 当時、バンクスも含めて多くの科学者たちは、氷は真水が凝固したもので海水は氷結しないので、陸地のない北極には氷がなく太平洋へより迅速に到達できるはずという仮定を立てていた。
- 18) スコアズビー父子については、スコアズビー (ジュニア) が残した自伝的な覚書などの資料を甥の Scoresby-Jackson が編集し、伝記的事実を補足した *The Life of William Scoresby, M.A., D.D., F.R.S.S.L. & E.*、C. Ian Jackson を参照。
- 19) 1827 年のパリー探検隊までこの記録は破られなかった。
- 20) *The Life of William Scoresby, M.A., D.D., F.R.S.S.L. & E.* を編集した Scoresby-Jackson は、スコア

- ズビー (ジュニア) が書いた部分を引用符に入れている。
- 21) 17 歳という年齢は特に若くはない。1820 年代のエディンバラ大学入学者の平均年齢は、14 歳半であった (Birse 52)。
 - 22) 註に補足されたスコアズビーの手紙の出典は Scoresby to Banks, 2/10/2017, U. Y. Beinecke Banks MS. N.H.M. B.L. D.T.C. XX 42–47。バンクスはダンダスにスコアズビーの報告をほぼその通り伝え、北西航路発見の航海を提言している (329–30 n. 1)。
 - 23) ロス海軍大佐 (Ross, Sir John, 1777–1856) が率いた探検隊は、カナダ北部の北極圏内諸島を通り抜けて北極へ至る航路を取り、バカン (Buchan, David 1780–1838) が指揮した隊は、北極海の横断を目指した。
 - 24) スコアズビー (ジュニア) は、1822 年の妻の死を契機に聖職を志し、1823 年の北極への航海が最後となった。
 - 25) パリーの指揮で、バフィン湾 (グリーンランドとカナダの北極圏内諸島のバフィン島の間の湾) からランカスター海峡を通る航路であった。パリーについては、ODNB の J. K. Laughton による論文を参照。
 - 26) 1819–20 年のパリー隊の北極海探検は、パリーの乗組員に対する人道的な扱いも含めて、その後の北極探検のモデルとなる。パリーの北極探検の記録は全て海軍省の公認を得てジョン・マリーから出版された。MWS は、第 3 版にこれらの記録を反映させようと思えばできた可能性がある。
 - 27) リチャードソンには非常に厳しい行軍の中で死亡した隊員たちの死因や死体の扱いなどについての疑いがかけられるのであるが、フランクリンはリチャードソンを信じ、また、海軍省は調査委員会を設置しなかった (Riffenburgh)。
 - 28) フランクリンは、1845 年、3 回目の探検に出発したが、バフィン湾で消息を絶った。1847 年から 1859 年の間、海軍省などが支援して捜索隊が出された。
 - 29) ウォルトンはサントベテルブルクで投函した第 1 の手紙の冒頭で北極を “the region of beauty and delight” (vol. 1. 5) と夢想しているが、フランケンシュタインが語る氷上の追跡の描写、最初の手紙の約 9 カ月後にウォルトンが書いた “Walton in continuation” では、極寒の氷海の現実が示される (vol. 3. 176–82)。
 - 30) 船医も含む外科医 (surgeon) は内科医 (physician) よりも格下と考えられていた。例えば、オースティン (Jane Austen, 1775–1817) が小説家志望の姪の原稿についてコメントした 1814 年 8 月 17 日付の手紙では、“I have also scratched out the Introduction between Lord P. & his Brother, & M^r Griffin. [p. 3] A Country Surgeon (don’t tell M^r C. Lyford) would not be introduced to Men of their rank” (280) と書いている。
 - 31) ダーウィンは、16 歳でエディンバラ大学医学部に入学する。1 年半後、医学を断念し、牧師を目指してケンブリッジに入学しなおすが、昆虫採集や自然観察、地質学に没頭していた。
 - 32) 調査探検船の船長ウォルトンと救助された科学者フランケンシュタインとの船上の友情は、20 世紀以降に書かれるナポレオン戦争を舞台とする海軍歴史小説のジャンルにおける友情のテーマの先駆的なものとも言える。このジャンルでは、オブライエン (O’ Brien, Patrick 1914–2000) の “Aubrey-Maturin Series” (1970–2000) が有名だが、ストックウィン (Stockwin, Julian 1944–) の “Thomas Kydd Series” (2001–) では、1793 年に海軍の強制徴募で水兵になり上級将校へと這い上がるキッド (Thomas Kydd) と伯爵家の跡継ぎの身分を放棄して水兵となるレンジ (Nicolas Renzi) の階級を越えた友情がテーマの一つとなっている。レンジはイギリス・ロマン派の文学に共感しており、1793 年にキッドにワーズワスの詩集をプレゼントし (Kydd ch. 10)、1798 年には、出版直後の『抒情歌謡集』 (*Lyrical Ballads*) を朗読した

- りする (*Tenacious* ch. 1)。
- 33) ウィンターソンの小説では、ウォルトンはロンドンに帰還している。“Captain Walton is well known to the nation—something of a hero, since his successful exploration of the North-West Passage and his journey to Antarctica” (179).
 - 34) 「物語医療学」(narrative medicine) という概念を提唱したのは、コロンビア大学のメディカルセンターの内科医かつ、医療人文学・倫理学部教授の Rita Charon である。コロンビア大学メディカルスクールの中の物語医療部門を創設したシャロンは、*Narrative Medicine* で、医療行為における文学の重要性、特に、患者の物語を聞くことの意義を認め、死すべき運命にある人間に対する医療は cure ではなく、care であるということを強調している。